

山道具、今昔（第3回） 登山靴

右の靴は私が50年以上前に買った登山靴で、ちょっと思い出が詰まったものである。当時の山靴の世界では、「たかはし」ブランドが最高の登山靴で、ヒマラヤ遠征隊や南極観測隊もこのメーカーに特注した。全てオーダーメイドであったから、当時岡山にいた私は岡山の登山用具店に頼んで足形を写し取ってもらって、そこから東京の高橋靴店に注文して作って貰ったのだった。



スイス産の牛革一枚革を使ったもので、踵の後ろで革の両端を縫い合わせた以外には革の繋ぎ目がなかった。見た目も非常にスッキリしたものであった。靴底とソールのビブラム、甲皮、コバなどは全て手縫いで縫い付けされていた。一足一足が手造りであったから値段も相当に高かったと思うが、食うや食わずの貧乏学生がどうやってこの代金を捻出したのか今もって覚えていない。ピッケルの時と同様に、またまた授業料をゴマカシたのかも知れない。この靴は非常に丈夫であったので、何回かソールの貼り替えはしたが30年近く使った。2代目もやはり「たかはし」で作って貰ったが、こちらは茶色の牛革で多少はスリムにできていた。2代目は数年前まで現役であったが、岳友達から「今頃こんな遺物の如きモノを履いていると、他人から馬鹿にされるぜ」と“馬鹿にされた”ので、名残は尽きなかったがお蔵入りにして、「最新の素材と歩行工学の粋を駆使した」「フット・ギア」なる舶来の靴に買い替えた。

「たかはし」の靴は、甲皮も靴底も厚い革製であったから、目方はいずれも両足で3kgあった。今の高所極地遠征用のダブルブーツと同じ重さである。今の軽くて履き心地の良い“フット・ギア”と比べれば、重くて固くてまるで神主の木靴を履いているようなものだったが、「たかはし」を履いていたのは大体がベテランであったから、実力は無くてもこの靴を履いていれば一目置かれたと思いたい。

2代目を作った時に店のオヤジから、1代目の黒色の靴は店にとっても記念碑的な製品であり、今では店にも保存されていないので記念に譲ってくれないかと頼まれたが、当方にとっても思い出の詰まったものなのでご勘弁頂いた。店は、靴職人が高齢化して靴が作れなくなったので10年ほど前に廃業した。四谷駅近くの職人が3人ほどいるだけの小さな登山靴工房であった。



靴の話をした序に、もう一つの古代遺物の履物について触れておきたい。今は雪山では登山靴の上にスパッツを装着するが、昔はスパッツは無く、オーバーシューズというものを靴の上から履いた。これは靴が雪で濡れることがなく快適なものであった。底部には革が張ってあった。写真は40年ほど前まで私が使っていたものである。今ではこのオーバーシューズのアイデアは高所極地登山靴に受け継がれて、靴とスパッツが一体化したゲーター靴となって甦っている。次回はテントなどの予定。

[「山道具今昔」目次へ戻る](#)